

御鑄物師会の可部鑄物訪問

(一財)素形材センター 専務理事 板谷 憲次

はじめに

9月25日、広島市において、第19回御鑄物師会が開催された。2年振りの開催である。

良質の砂鉄が採れる中国山地では、6世紀頃に“たたら製鉄”が始まり、江戸時代後期から明治時代初期の頃には奥出雲地方などで最盛期を迎えている。このたたら製鉄の技術は中国地方全体に広がっており、訪問した可部は、広島市の北、中国山地への入口に当たり、古くから鑄物産地として知られていた地域である。御鑄物師会のメンバーは、この伝統的な鑄物の産地である可部を訪ね、可部鑄物の歴史に触れるとともに、現代の可部鑄物師の活躍を今後の活動の励みとすべく交流を行った。

本稿では、この御鑄物師会の活動を報告し、あらためて伝統的な日本のものづくりの心を振り返る縁としたい。

可部鑄物師とたたら製鉄

中国山地周辺地帯は中世から近世にかけて砂鉄を原料とするたたら製鉄の中心的存在となった。19世紀中頃までは鑄物造りの原料鉄はこのたたら製鉄に依存していた。

広島においてもたたら製鉄の発展と合わせ、13世紀頃から鑄物造りが始まっている。広島市街から北へ20km、出雲街道と石見街道の分岐点であり、太田川にも面して交通の要衝の地であった可部町は、宿場町や物資の集散地として発展すると共に、県北の山県郡や島根の石見地方などで産出していた良質な砂鉄と、中国山地の豊富な木炭が利用できるという好立地に恵まれていた。たたら製鉄技術が中国地方を中心として発展したことで、可部における鑄物造りも大きく発展していった。可部町を中心としたこの地域の鑄物生産は江戸時代の後半には安芸広島藩で最高の生産量を

誇ったとされている。可部における鑄物師については詳細な記録は残されていないようであるが、残っている鑄造品等からは、三宅氏、細田氏の名があげられている。

第19回御鑄物師会、可部町開催

第19回の御鑄物師会は、全体で14名（御鑄物師は9名）の参加により、JR広島駅からスタートした。東京からの日帰り組も含め、全国各地からの集合で、行事の開始は午後0時20分であった。

参加した会員は、

岡本太右衛門 (株)岡本代表取締役会長
 芦澤 亮夫 (株)ヤマトインテック取締役会長
 岡本友二郎 鍋屋バイテック(株)取締役
 金森慎太郎 金森藤平商事(株)代表取締役社長
 金森 勇 (株)金森合金代表取締役会長
 津田 家宏 五位堂工業(株)代表取締役社長
 田中 義宏 (株)田中鑄造所代表取締役社長
 田中 保昭 大和重工(株)代表取締役社長
 広瀬 翁 ヒロセ合金(株)代表取締役社長

の9名で、関係者としては経済産業省素形材産業室、新日鐵住金(株)、(株)神戸製鋼所、さらに団体からは、事務局である(一社)日本鑄造協会と(一財)素形材センターが参加した。

この御鑄物師会のメンバー14名は、移動の便から、バスで可部町に移動し、

- (1) 明神公園鉄燈籠、可部駅周辺見学
- (2) 大和重工(株)本社工場見学
- (3) 両延神社(梵鐘、鉄燈籠)見学
- (4) 大和重工(株)吉田工場見学
- (5) 参加者懇談会

と、全行程約8時間の充実した一日を過ごした。訪問先の概要などは以下の通りである。



写真1 可部駅西口広場

(1) 明神公園鉄燈籠、可部駅周辺見学

広島駅からほぼ北へ20km、可部駅はJR西日本・可部線（広島－可部）の終点である。可部駅から可部街道を挟んだ向かいには大和重工(株)本社工場がある。駅が同社の玄関口のような印象である。バスを同社に止めて一行がまず向かったのは可部鋳物師のシンボルとも言える広島市指定重要有形文化財の“可部鉄燈籠”の見学である。

鉄燈籠は駅から数分の明神公園内に雨除けの屋根を付けて保存されていた。鉄燈籠は高さ313cm、基礎周囲565cm。鋳鉄銘からは、文化5年（1808年）に可部鋳物師の三宅惣左衛門により鋳造されたもので、可部鋳物を今に伝える最古の遺品とされている。案内板には、「当時この場所は、『船入堀』と呼ばれる川船の発着場で、鉄燈籠には毎晩灯がともされ、地元の人々からは『船神さん』として崇拜されており、現在では金比羅大権現鉄燈籠の名で親しまれています。」とある。確かに、鉄燈籠は見事なもので、その笠は六角、上に少し反り返り、飾りの蕨手は重からず軽からず、当時の可部鋳物師の想いが伝わる優美な姿を今に残っていた。

鉄燈籠の美しさを堪能した後は、JR可部駅西口広場の「五右衛門風呂」と「大羽釜」のモニュメントを見学した。このモニュメントはこの地域の伝統的な鋳物造りの象徴として、2007年12月の可部駅西口広場完成を記念し、地元の要望で、大和重工(株)が製作・寄贈したものであり、駅前に釜？と疑問も感じたが、



写真2 可部鉄燈籠（明神公園内）

思った以上に景観にマッチしていた。

西口広場の大羽釜は同社の玄関に飾られている創立70周年の記念に作られた世界最大の大羽釜（外径2.9m、内径2.43m、高さ2.1m、重量2.8t）と比べると半分ほどのサイズであるが、五右衛門風呂（逆さに置かれている。）と並べるとオブジェとして、他の景観鋳物製品と調和している。地元で愛される可部鋳物師が少し羨ましく感じられた。



写真3 世界一の大羽釜

(2) 大和重工(株)本社工場見学

大和重工(株)は天保2年（1831年）創業、たたら技術を受け継ぎ、当初はナベ、カマの製造からスタートした可部鋳物を代表する企業である。玄関の大羽釜は前述のとおり、偉容を誇っている。

同社の経歴を見ると、吸収合併、増資の文字が何回か出てくる。同社は地域の雄として、同業数社を吸収合併し事業を拡大するとともに、十数回に及ぶ増資により資本を充実させてきている。現在は、資本金6億51百万円、鋳物生産能力は年産2万28百tである。同社は、産業機械関連機器部門と住宅関連機器部門を有している。



写真4 大和重工(株)田中保昭代表取締役社長



写真5 可部駅前から大和重工(株)本社工場



写真6 大和重工(株)吉田工場

本社工場は同社の主力部門である産業機械関連機器部門で、精度の高い鋳物鑄造技術によって高品質のディーゼルエンジン用鋳物部品、工作機械用鋳物部品を製造している。

溶解・鑄造は25t高周波炉2基、フラン造型、機械工場では国内最大級の五面加工機、横中ぐり盤をはじめとした設備を備え、粗加工から仕上げまで一貫して、ユーザーの多様な要請に対応している。製品重量は1kgから45t、長さ11m、幅3.5mまでの超大型製品までの製造が可能である。

御鋳物師会メンバーは、田中保昭代表取締役社長から会社概要の説明を受けた後、鑄造工場、機械工場、組立工場における大型鋳物製品のフラン樹脂の型込み作業工程から機械仕上げまでの工程を通して見学した。

巨大なディーゼルエンジン用鋳物筐体が手間をかけて精度良く造形されている工程は、ベルトコンベアで流れる自動車鋳物の製造ラインと異なり、大型機械用鋳物製造の日本の先端技術力を体感できた。特に、五面加工機や中ぐり盤による精密な機械加工は機械鋳物製品の付加価値向上には不可欠であり、大規模な投資を行い、果敢に挑む、地域を、日本を代表する機械鋳物企業の心意気と、それを当然のようにこなしている職人の熟達した高度な技を垣間見たように感じた。

(3) 大和重工(株)吉田工場見学

吉田工場は、大和重工(株)の2大部門の一つ、住宅関連機器部門の主力工場である。同部門は鋳物ホーロー浴槽の製造を中心に広く浴の文化を見つめ豊かな生活提案を行っている。また、住宅関連機器部門では、橋の親柱や高欄、街路灯、マンホールの蓋、ベンチなどの景観製品も製造している。可部駅周辺は同社の景観製品で飾られており、いかにも鋳物らしい落ち着いた風情を楽しませてくれる。

吉田工場は本社工場のある広島市安佐北区から北西へ約20kmの安芸高田市吉田町に立地している。

広島市の北部である可部町から吉田町までは出雲街道を北東に中国山地深く入る道程である。出雲街道は安芸高田からさらに北西に伸び三次盆地に至る。三次

市からはほぼ真北に向かうと出雲に至る。古くは多くの商人や旅人が往来したのであろう。また、この道は、砂鉄、木炭、たたら技術が行き交った道、“鉄の道”でもあったのではと思う。

吉田工場は昭和37年に新設され、昭和47年にはそれまで本社工場にあったホーロー加工設備を移設集約化している。

吉田工場には、3.5tの低周波炉2基、Vプロ造型ライン2ライン、フラン造型ライン1ラインの鑄造工場とホーロー浴槽製造のためのマッフル炉(双室)2基、施釉回転装置2基等ホーロー加工設備を備えたホーロー工場がある。ホーローは鋼板等にガラス質の釉薬を吹き付け、高温で焼き付けたものであるが、大和重工(株)のホーロー浴槽は五右衛門風呂や大羽釜製造技術を現代に生かした鋳物にホーロー加工を行った鋳物ホーロー浴槽である。

御鋳物師会メンバーは、工場事務所ではブリーフィングを受けた後、Vプロセス造型ラインの作業工程、鑄造ラインを見て、素形材業界ではなかなかお目にかかれないホーロー加工工程で歩みを止めた。まだ数年の経験という技術者の巧みな施釉作業と真っ赤になって焼き付けの終えた浴槽がマッフル炉から出てくるプロセスに感嘆と共に見入ってしまったのである。ホーロー加工は半永久的とも言える堅牢性を有しており、さらに多彩なカラーパターンも実現できるとされているが、鋳物ホーロー浴槽の美しい仕上がりを見ると納得できる。古くから、生活必需品であった鍋、釜の製造を行っていたたたら製鉄の伝統技術を現代に生かし、素晴らしい製品を生み出したものだとつくづく実感した。

同社では、この鋳物ホーロー浴槽を中核に浴のソフト開発、浴のインテリアを追究している。人々の生活を豊かにするものづくりを実践してきた鋳物師の伝統が見事に息づいている。更なる発展を期待したい。

(4) 両延神社訪問

両延神社は可部町から北西へ車で10分程度の安佐北区亀山南に位置している。



写真7 両延神社（左に鉄燈籠が見える）

同神社のいわれは、建久元年（1190年）、当時の安芸の国の守護だった甲斐源氏の武田朝信が宇佐八幡宮の分社を下四日市村岡崎（太田川の少し上流）に勧請し、その八幡宮を建長5年（1253年）に武田信時が現在地に奏還したのが始まりとされている。八幡宮は、源氏の守護神として尊崇され、両延神社も武田氏代々の信仰が厚く、その庇護を受けて社運隆盛であったと言われている。武田氏の衰亡とともに社運も衰えたと



写真8 両延神社の鉄燈籠と梵鐘

されているが、文禄3年（1594年）の記録では依然大社であったこともうかがわれている。

両延神社には可部鋳物の梵鐘と鉄燈籠が置かれているとのことで、御鋳物師会のメンバーはこれらを見学するために訪れた。

神社に梵鐘と言うと首を傾げる方もいるのではないかと思う。しかし、我が国における神仏混淆の長い歴史を考えれば、また、氏子の寄進に色々な形態があることを考えれば、梵鐘が寄進されたとしても、不自然ではない。

それが鋳物の街可部にある神社であれば猶更という感じがする。

実際、梵鐘の銘をつぶさに見てみると、この梵鐘は大和重工(株)が昭和44年（1969年）に寄進したものであることがわかった。また、鉄燈籠も同様で、新しいなと思って見ると、平成10年（1998年）友鉄工業(株)（鋳造業）、進和建工(株)、(有)協栄太田石材加工の3社で寄進したものであった。

これらは、可部の鋳物師の鋳造技術が現代まで脈々と続いていることの証左であり、また、地元に関わり、愛されていることを示している。

4. おわりに

御鋳物師会には創業800年の歴史を有する会員もいる。御鋳物師会の会員の方々と触れ合うことで、歴史の重みを背負いものづくりを地道に行っていくことの大切さを改めて感じる。

経済産業省で策定した「新素材ビジョン」においても、「時代のニーズを積極的に取り込んで続いた長寿企業」として江戸時代から続いている長寿企業が紹介されている。こうした長寿企業は「時代のニーズに機敏に対応し、製造する品物や鋳造する材料を変えて、その時々新たな需要に応じてきた」とされている。まさに長寿企業の経歴がそれを証明している。

今回の御鋳物師会では、和鋼、たたら製鉄の発展と共に歩んだ可部鋳物師の世界に触れることで、また新たな鋳物の発展の歴史を学ぶことができた。時代にあわせて、鋳物を人々の生活等に必要な姿・形状に変えていく営みは続いている。訪問した大和重工(株)の世界一の大羽釜も見事であるが、鋳物ホーロー浴槽は時代のニーズを捉えた素晴らしい鋳物製品である。人々の生活に役立つことは、ものづくりの基本である。技術はどんどん進歩しているが、ものづくりの基本は普遍である。日本の伝統的な“ものづくりの心”をいつまでも大切にしたいものだと思う。